

その命、虚無へと還
れ！

仮面ライダーゲイツ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この命は優しき聖女の幸せの為に。

たとえ俺が君の側にたちその愛らしい笑顔が向けられなくとも君が幸せなら喜んで身を引こう。

しかし、叶うなら君の笑顔の側に笑った自分があることを。

フリード・セルゼンが主人公の小説が少ないと思いき書いた作品です。

目次

プロローグ	1
焼き鳥？知らないですね。それより忘れ 物を取りに行こう。	12

プロローグ

side???

俺はいつも一人だった。生まれ持ったの白髪に紅い眼、金髪碧眼の両親から生まれた普通じゃない俺は幼いうちに教会に捨てられた。

ん？悲しかったかって？いんや別に。

何？次は両親に何か思うことはあるか？だと？

特にないかな。まあ、生まれたばかりで捨てなかつたことだけは両親に感謝してるよ。

教会に拾われてからは聖書の神や燐天使（セラフ）を崇拜し崇めよと最初に教えられた。そこでの生活はまあ、窮屈だったけど飢えることはなかつたから満足してたかな。

聖書を読み覚える為文字を教えて貰えたり、見かけだけ神やセラフに祈りを捧げていれば衣食住も普通に成長できるまでは貰えた。

物心つく頃にはあることが追加された。悪魔祓い（エクソシスト）としての戦闘訓練に勉強だ。

まず、この世には神も天使も存在する。更に、墮天使や悪魔などの化け物も存在し、そ

れを神と天使のために倒すために戦う術を学ぶそうさ。しかし、俺は別に神やセラフなんて信仰していたわけじゃないし、本当に存在すると知ってもそれは変わらない。それでも形だけ祈っていたら今までバレていなかったから平気だと思っていた。

戦闘訓練を始める前に俺や参加する子供全員に柄だけの剣と白い装飾をされた銃が配られた。本物の悪魔祓いの武器らしい。

そして、俺は教えてくれる神父の言葉を聞いて冷や汗を流した。この武器は天使様の光の力を加護として貸していただくことで使用できるものだ。その強さは信仰の大きさによって決まる。信仰のないものには使えないと。

ヤバイ！俺は震える手でその武器を握り震えていた。俺には信仰がない。つまりこの武器は使えない。使えなければまた捨てられのたれ死んじまう！

順番に武器を起動させてそれを見る神父。そしてついに俺の番になってしまった。もう、ダメだと諦めながら剣を握りしめて力を込めると、ホウと神父が感心する声が聞こえた。俺は自分が握っている剣の刀身を見た。そこには他の子より白く輝き力強い波動を感じる光の剣があった。そんな俺を神父は「これからも励みなさい」と言っただけで行ってしまった。俺が神やセラフに違和感を持った瞬間だった。

戦闘訓練が始まり2年が経った。俺は他の子より才能があるらしく負け知らずだった。たまたま、訓練に教官として参加していた本職の悪魔祓いの大人と模擬戦をやった

時も僅差だが確かに勝利を掴むことができた。

協会の本部から使者が来た。俺をとある実験に参加させるために迎えに来たらしい。プロジェクトの名はI・K・U・S・Aと言うらしい。内容は神が作り出した神器（セイクリッドギア）を人為的に再現しようというものだった。このイクサは扱うのに素質がいるらしく戦闘力の高い者を集めて試しているらしい。俺は拒否権がないらしく別の教会に連れていかれた。

その教会には俺を含めて5人の適正者が集まった。全員、俺より年上で本職の悪魔祓いだった。全員1回装着させてもらったが俺の前にやった4人はイクサの鎧は纏うことができたがまともに動くことができずに数歩歩いただけでイクサが解除されてしまった。武器やリミットを外すシステムすら発動出来ずにだ。研究者らしい神父たちは俺がやる前に失望でテンションがだだ下がりしていた。

しかし、俺がイクサを纏って動いた瞬間、テンションが気持ち悪いぐらい上がった。俺は数歩歩くどころか実験室を全力で走っても解除されず、更に武器であるイクサカリバーも展開できたのだ。これにより俺は正式にイクサの担い手になった。

1ヶ月がたち俺はイクサのリミットを外すシステムを使うことができないでいた。研究者らしい神父たちは戦闘経験が足りないのだろうと考えこれから下級悪魔を狩に行くことになった。もちろん研究者や悪魔祓いの護衛付きで。

下級悪魔のいる森に着き、様子を見てくると言つて護衛の悪魔祓いが1人様子を見に行つた。5分ほど経つと先ほどの悪魔祓いの悲鳴が森に響いた。戦闘態勢をとる俺たち。ドス！ドス！とデカイ何かが歩いてくるのがわかる。そいつは体長2メートルを超える肉達磨みたいな悪魔だつた。そこからは早かつた。護衛は悪魔に斬りかかるがそのデカイ体型から放たれる強烈な一撃を受け、研究者は逃げようと背を向けたところを狙われ一撃を喰らい俺以外全員物言わぬ肉片に変わった。俺はこんなところで死ぬ訳にはいかないとイクサを起動させて鎧を纏つた。そして、俺の中で何かが弾け、イクサが周りを吹き飛ばすほどの衝撃を発生させた。そこから先は覚えていない。気付いた時にはイクサは解除され目の前にはさつき悪魔が真つ二つに切り裂かれ倒れてい

た。

後日、俺が倒したのは上級はぐれ悪魔でありイクサのバーストモードを発動させて倒したらしい。俺は、それから正式に悪魔祓いに任命され毎日協会の敵を狩り続けた。初めて目の前で起きた他人の死に毎日の様に戦う生活に俺はあの頃は疲れていたんだと思う。協会の上層部は疲れていても任務を成功させる俺を特に気にはしなかった。そんな時だ。太陽の様な笑顔の君に初めて会つたのは。

君は、俺の傷を癒し疲れた様子の俺の話の話を聞いて泣いていいんですよと慰めて抱き締めてくれたよね。俺はその時初めて泣いたんだよ。そして、独りぼっちだった俺の初め

ての友達になってくれたね。俺はそんな君が愛しくて心の底から欲しくて仕方がなかった。だけど、それでは君は幸せにはなれないよね。だから我慢したよ。そして、誓った。優しい君は俺が守る。君を幸せにすることが出来る人が現れるまでずっと。その日から俺は君の元に来るだけ通い詰めた。君と話しているだけで幸せだった。しかし、そんな幸せもすぐに終わった。君が、協会から追放されたと聞いた瞬間。

side end
???

side アーシア

廃教会の地下の部屋の十字架に身体を貼り付けられた私。もうすぐ、私を前から見上げる墮天使レイナー様私の神器を取り出されて死んでしまう。最後に思うのは日本に来たばかりの私に優しくしてくれて私を守ろうと傷ついたイツセイさん。そして、協会ですでた最初の友達。ドジな私を助けてくれた寂しがりやなあの人。もうすぐ死ぬとわかると急にその2人に会いたくなってしまう。死にたくない！生きていたい！と涙が出てくる。

「さあ！アーシア。術式は完成した！これで貴方の力は私のものとなり私はアザゼル様に愛される！有難いと思いなさい！」

私を貼り付けにしている十字架の周りの魔法陣の光が強くなる。死にたくないとい

う思いが更に強くなり、いつも助けにくれた彼を呼んでしまう。

「最後に会いたかったです。フリードさん。」

私の目から涙が一滴流れ落ち教会の地面に落ちた。そんな時、

「最後になんてさせない。アーシア、君を守ると俺は誓ったのだから。」

ドン！ドン！ドン！と私を十字架に固定していた拘束を砕き、更に魔法陣を折り壊す音がした。拘束が解かれたことで重力に従い落ちる私。地面に落ちる瞬間わたしを誰かが抱きとめた。顔を見ると涙が溢れた。白い髪に紅い目のここにいるはずのないさ彼がそこにいたのだから。

「今回は俺たち間に合った様で良かったよー。じゃあ、アーシアちゃん、ちよつとそこに座って休んでてちょ？」

私を笑わせるために一時期やっていたふざけた口調で話すフリードさんは私を十字架の後ろに隠す様にして下ろすとレイナー様に向かって歩きだし、思い出したかの様に顔だけ私の方に振り向かせて、

「直ぐにあのゴミ片付けて来るから、いい子にしてろよ？」

真面目な時や真剣な時に出す本来の彼の口調で話しかけられる。なぜか安心してしまいそこで私の意識は緩やかに無くなった。

sideアーン

sideフリード

アーシアはどうやら寝たようだ。まあ、長時間十字架に吊るされたなら疲れもするか。

「貴様！私の邪魔をしてタダで済むと思ってるの！殺してやる！お前たちやれ！」

ゴミの言葉に従いはぐれ悪魔祓いが俺に向かって来る。だが、数だけのゴミだ。さあ、早く掃除してしまおう。

ベルトを取り出して腰に巻く、そしてイクサナツクルを手のひらに押すようにして起動させる。

《レ・ディ・ー》

「そのベルトにナツクル。そして白髪に紅い目、まさか！貴様、イク」

「ゴミが黙れよ。俺は今イラついてんだからよお！」

俺は殺気をゴミに向かって発する。

「ヒイツ！お、お前たち早くやりなさい！」

向かって来る神父供を見ながら、イクサナツクルをベルトに装着させた。

「変身。」

《フィ・ス・ト・オ・ン》

俺の前に半透明な鎧が現れ俺と重なる瞬間具現化し、装着される。その瞬間神父供が銃を発泡し、弾丸が向かってくる。俺は、躲さずその身に銃弾を受ける。周りの地面にも当たり土煙が舞い上がる。鬱陶しい。

「は、は、はっは！何がイクサよ！死んだじゃない！虚仮威しだったじゃない！はっはー！」

ゴミが五月蠅い。イクサカリバーを出してガンモードにして、発泡しながら右からひだりに動かす。ダダダダダダダダダッ！と光の力が込められた銃弾が雨の様に発射される。銃弾の先にいた神父の「ガッ!?」「グッ!?!」といった声が聞こえた。土煙が晴れると身体中に穴を開け血だらけに生き絶えた神父たちに、羽が片方千切れ飛びもう片方にも銃弾を受けて血だらけにしたゴミが壁に寄りかかっていた。どうやら自分の翼を盾にして生き延びたらしい。この銃撃も躲せないようなら本当にゴミらしい。そんなゴミに歩いて近づいていく。

「待ってーいや、待って下さいー！私の身体を好きにしていから命は助けて！お願い！お願いしますー！」

土下座しながら命乞いをしてきたゴミ。なんとも醜い。

「ゴミに慈悲などない。その命、虚無へと還れ！」

イクサナツクルをベルトの方に押し込み取り出す。イクサナツクルは白い電気を纏

いバチ！バチ！と放電している。

《イ・ク・サ・ナツ・クル・ラ・イ・ズ・アツ・プ》

イクサナツクルでゴミに殴りかかり、ゴミに命中し、ゴミの身体に5億ボルトの電流が流れ込み吹き飛ばされながら壁に衝突し、壁を貫通して吹き飛んだ。

イクサナツクルをベルトに戻しアーシアの元に向かおうとすると、この部屋に入る為の階段を下つてくる音がする。警戒を解かず奴が入ってくるのを待っていると、バン！と扉が開かれ、

「アーシアー！」

と彼女の名を叫びながら茶髪の少年が入って来た。

「あれ！神父全員死んでる！？レイナーレもない！お前は誰だよ！アーシアをだせ！」

五月蠅いやつだ。

「アーシアは無事だ。その神父とゴミ、ではわからんか。墮天使の女は俺が殺した。俺はフリード・セルゼン。アーシアの最初の友達だ。俺が答えたんだから貴様も答えろ。貴様はなんだ？」

「俺は、兵藤一誠！アーシアの友達だ！」

「悪魔がアーシアの友達だと？」

「なんだよ文句あつか！」

「すまない、アーシアの友達なら大丈夫だよな。警戒してすまん。アーシアを連れて早くここから出よう。早く君の主人に会わせてくれ。」

アーシアのいる所に足早に向かいアーシアを抱き上げると彼と共に階段を登った。最中、彼が

「なあ、簡単に俺を信用していいのかよ?」

「ん?アーシアの友達なら大丈夫だろ。彼女はドジなところがあつて可愛いが芯はしっかりしていて悪意を持っている人が他人以上の関係になろうとしたら本能的にわかるという才能を持っている彼女が友達になったなら大丈夫さ。それより俺のことはフリードと呼んでくれ。」

「そうなんだ、スゲエなアーシア。よろしくフリード。俺のことはみんなイツセーって呼んでるからそう呼んでくれ。」

「わかった、イツセー。」

そう話している間に階段を登り終わると、赤い髪の少女を中心に黒い髪のこと白い髪の子に金髪の男が出迎えてくれた。赤い髪の少女が

「お帰りなさいイツセー。それでイクサが私の領土になんの用かしら?」

「それよりもアーシアを休ませられる場所に案内してくれないか?此処じゃ休みのにも話すのにも向いてないからな。」

「わかったわ。私たちの拠点に案内するわ？ イッセー、子猫、祐二案内してあげて、私たちは先に戻って準備しておくから。」

「「わかりました部長。」」

まだ夜は明けない。だけど、聖女の未来は確かに変わった。この変化で物語がどう変わるかはまだわからない。

これは、外道に落ちなかつた神父が聖女を幸せにしようと頑張る話。さあ、フリード君の初恋は叶うのだろうか？

焼き鳥?知らないですね。それより忘れ物を取りに行こう。

sideフリード

『ブー!当機は間も無くこれよりフランス、パリのシャルルゴールド国際空港に着陸いたします。朝早くから申し訳ございませんがシートベルトをしっかりと締めて着陸に備えてください。』

「ん、朝か。んんんんっ。」

飛行機の座席シートは寝づらくてしょうがない。身体のうちこちが凝ってカチコチだ。座席に座りながら隣の席でまだ寝ているアジアに迷惑をかけない程度で背伸びをする。さて、もうすぐ着陸することだそろそろアジアを起こすことにしよう。

「アジア、アジア。そろそろ空港に着く。起きてくれ。」

肩をゆすりながら声をかけて起こす。

「ふにゅ?んんんっ。ふあゝゝ、おはようございますフリードさん。」

「おはようアジア。」

俺とアジアはフランス、パリのシャルルゴールド国際空港に行きの飛行機に乗って

いる。何故、こうなったかは2日前のリアス・グレモリーとの会談まで遡る。

ぶつちやけると会談は早く終わった。アーシアは既に教会に追放されており、俺はアーシアを追いかけて抜けて来た。だからもう教会とは所属していないこと。保護を求めること。

これに対しリアス・グレモリーは直ぐ了承してくれた。だが、俺たちに眷属悪魔にならないかと勧誘して来た。俺は人間でいることにこだわりはないが悪魔に興味はないからと直ぐ断った。

しかし、アーシアは迷っていた。友達のイツセーと一緒に居られるのは嬉しいが悪魔になつたら俺との繋がりが無くなると思つたのだそうだ。だから、俺は

「俺とアーシアは、アーシアが絶交するまでずっと友達だ。たとえば、種族が違つてもだ。」

と言つてアーシアに自分の好きにするように言つた。そして、イツセーも

「そうだけ！フリードの言う通り何があつても俺たちは友達だ！」

と大声で言つて来た。しかし、五月蠅い。屋内なのだからそんな大声を出さなくても聞こえるぞ。

それから直ぐアーシアの考えはまとまつた。アーシアは悪魔になることを選んだ。

リアス・グレモリーは今すぐ眷属化しようとしたが俺が待ったをかけた。

アーシアはまだ日本に移住するための正式な手続きをしていないから一度フランスに帰って手続きをしなければ行けない。フランスは日本より悪魔祓いが多いので手続きが終わるまで危険を少しでも減らしたいので待つて欲しい。俺も野暮用があるからついて行きます。1ヶ月ぐらいで余裕で終わるのでアーシアに観光させながら行つてきますということに今に至る。

まずは予定通り空港に到着してからは事前に予約したそれなりに評判が高いホテルにチェックインした。それから近くの日本でいう市役所に行つて俺とアーシアの日本への移住届けの手続きをした。容易に3日掛かるらしくそれまではフランス観光を行なった。エツフェル塔に美術館巡りなどいろいろ行つた。3日後、手続きを終えたら、俺の野暮用を済ます為にアーシアにクレジットカードと5日間ぐらい不自由に過ごせる金を渡し、くれぐれも危ないところには行かないことと注意して、とある山奥にある教会の研究施設に向かった。イクサの強化アイテムを手に入れる為に。

俺は今、目標の教会の研究を見渡せる位置から見据えている。さて、まず中の研究員や悪魔祓い達を殲滅してからゆっくりアイテムを探すとするか。

「変身。」

イクサの鎧を纏う。ベルトからとあるフェッスルを取り出してイクサナツクルとベルトとの間に差し込み、イクサナツクルを押し込む。

《パ・ワード・ド・イク・ク・サー》

すると教会の研究施設の側の地面を砕いて白いシヨベルカーのような機械、パワードイクサーが現れた。これがここにあるということはやはりあのアイテムはここにあるようだ。パワードイクサーに近付き乗り込むと騒ぎに駆けつけた悪魔祓い達が武器を構えて出てきた。

「パワードイクサーが動き出してもしかすればと思えばやはり貴様かフリード・セルゼン！何故貴様がここに！いや、それよりも裏切り者の貴様にイクサは相応しくない！行くぞみんな！アイツを倒すぞ！」

「ふん、貴様ら如きがイクサを扱えるわけないだろ。まあいいが、俺の目的はここにあるライジングへと至るためのアレを手に入れに來ただけで貴様らに用はない。逃げるのなら追いはしないつもりだったが向かってくるのなら叩き潰す！」

パワードイクサーを動かし、ザウルクラッシャーを地面に叩きつけ纏めて悪魔祓いを吹き飛ばす。さらに回転しながら動きザウルクラッシャーの回転横薙ぎ攻撃を行い悪魔祓いを一人残らず倒す。てか、なんで銃を使わないで剣で突っ込んでくるのか、馬鹿

なのではないか？

悪魔祓いの次は研究施設の番だ。ザウルクラッシュヤーでパワードイクサーの後ろに積んであるイクサポットを掴み研究施設に向けて投げる。着弾すると爆発して研究施設を破壊し中にいた研究員の悲鳴が聞こえてくる。更に、追加でイクサポットをドンドン投げつける。このイクサポットは転移魔法で使ったらすぐに補充されていくから何度でも投げることができる。5発目を投げた頃には悲鳴が聞こえなくなり終わったと判断した俺はパワードイクサーを降り、廃墟と化した研究施設に入って行った。

床はヒビ割れ、天井と壁は彼方此方崩れて研究員がそこら中に火傷を負ったり瓦礫に挟まれている中、進んでいく。途中瓦礫で塞がれて居た時はイクサナツクルの空気砲で吹き飛ばしどんどん進むと、扉の前になんか光る剣と共に倒れている悪魔祓いがいるところを発見した。光る剣は聖剣みたいだが興味がないので悪魔祓いを退けて中に入る。

その部屋の真ん中には台座が1つあり、その上に青い携帯電話が収められていた。あれが目的の物だとわかった俺は回収して研究施設から出てパワードイクサーに乗って帰った。なかなか、険しい山の奥にある研究施設だったため行きはかなりの時間が掛かったがこれなら早く帰れそうだ。

sideフリードend

side???

「あれがイクサか？そこら辺の雑魚とは違いようだな、なかなか骨がありそうだ。」

フリードが去った後の研究施設にある1人の人物が現れた。その人物は研究施設の中に入り、フリードが放つて置いた聖剣を拾うと、

「これで4本目。これ以上集めるのは無理か。だが、戦争を起こすのには事足りる。さあ、いくとするか。忌々しい魔王の妹どもがいる駒王町へ。」

バサツ！と飛び上がったその人物はすぐ居なくなつたがそこには黒い羽根が残されていた。フリードの知らないところで何がおころうとしているようだ。